夫婦関係にみる「結婚」の意味づけ ——妊娠先行型結婚と恋愛結婚の再生産——

Making Sense of One's Marriage in a Couple's Talks: Reproduction of the 'Love-Marriage' in 'Pregnancy-Preceding Marriages'

永 田 夏 来
NAGATA Natsuki

The purpose of this paper is to discuss how a couple that got married after a pregnancy gives meaning to their marriage and interprets it. After analyzing their discourse, I realized that the relation between the pregnancy (and the raising of child) and the marriage is never explicitly mentioned. This is a strategy that allows the couple to talk about their marriage without rhetoric hides the contradictions inherent to their marriage and enables them to give it the same meanings as a 'love-marriage'. Then it becomes acceptable.

1. 問題の所在

少子化が進行するにつれて、その原因であるとされている未婚化・晩婚化への社会的関心が高まっている。日本における平均初婚年齢は男性で28.4歳、女性は26.1歳であり、年々初婚年齢が高くなっていることが指摘されている〔国立社会保障人口問題研究所 1997〕。初婚年齢の上昇の原因をめぐって、これまでさまざまな議論が展開されてきた。

代表的なものとして、恋愛観と結婚観の変化と経済状況の変化が挙げられるだろう。恋愛結婚の全盛期とされる1970年代には「結婚に至らない恋愛は本物ではない」という風潮であったが、1970年代以降におきた「恋愛の自由化」によって結婚と恋愛が分離したといわれている。このため、結婚によって関係が「本物」であることを示さなくても親密さを保持できるようになった。制約の多い結婚生活をはじめよりも恋愛関係を続ける方がリーズナブルだと考える人が多くなった結果、晩婚化が進行したといえるだろう。また、経済状況が安定していた1960～70年代は、住宅などのインフラを整備する計画をたてやすかったといわれている。しかし、近年では、年功序列など制度の変化や、経済の低迷の影響を受けて、新しい生活をはじめするためのめどをたてにくい状況にあるといえる。結婚して新生活に飛び込むよりも親元でこれまで通り生活する方がリスクは低く、安定しているのである。このように考える人が増えたことは晩婚化に大きな影響を与えているといわれている〔山田 2000〕。

しかし、晩婚化はかならずしも未婚化を意味するわけではない。結婚する意志を持つ未婚者は減少傾向にあるとはされているものの依然として高い数字（男性85.9%女性89.1%）を示していて、結婚する意志がないとしている人々はごくわずか（男性6.3%女性4.9%）である〔国立社会保障人口問題研究所 1997〕。晩婚化を考えて行くためには、なぜ結婚しないか、を考えることはもちろん、なぜ結婚を先延ばしにするのか、という視点も必要だといえるだろう。結婚回避の原因のひとつに、より有利で魅力的な結婚相手を探すために独身が続けているのだ、とする議論がある〔江原1988、宮本・岩上・山田 1997〕。し

かし、現在恋人がいる男女の60%以上が現在の交際相手との結婚を希望している点や、結婚に至るまでの交際期間も年々長くなっている点、結婚しない理由として「適当な相手とめぐりあえない」よりも「必要性を感じない」が若干支持される傾向にある点〔国立社会保障人口問題研究所 1997〕などを考えると、特定の交際相手を持つ独身者がこれまでとは比較にならない程長い間独身生活を続けているという状況に目を向けることが必要なのではないだろうか。結婚を視野に入れつつ特定の相手と安定したつきあいを続けていっているにも関わらず結婚に踏み切れないでいるカップルは、結婚に対してモラトリアムな状態（以下結婚モラトリアムとする）にあるといえる。結婚モラトリアムという視点を持つことで、晩婚化傾向を支える多くの独身者の考えをより積極的に反映することができるのである。

2. 本稿の目的と意義

結婚モラトリアムの人々は結婚に対する積極的な心性と消極的な心性の両方を持っていて、結婚に対するきっかけをうしなっているといえるだろう。こうした状態は個人の間でもコンフリクトを起こすが、カップル間においても困難な状況としてたちあがってくると考えられる。カップルは互いの親密さを損なうことなく、結婚する/しないについて相手からの了解を得るために説明を行わなくてはならないからである。結婚をめぐるふたつの心性はどのように調停され、カップルの間で了解されているのだろうか。こうした分析を通じて、現在における結婚の意味を把握することができると考えられる。本稿の目的は、カップル間のやりとりを通じて、結婚モラトリアムにあったカップルが結婚に与える意味を把握することにあるといえる。カップルが自らの結婚をどう解釈しどう意味づけるかは、結婚にいたる経過やカップルが置かれている状況によって違ってくると思われる。分析を精緻に行うためには、ある程度の状況設定が必要だといえるだろう。そこで本稿では結婚モラトリアムのうらがえしとして、20代半ばから30代前半の、妊娠をきっかけとした結婚に注目したい。

高度経済成長期以降、恋愛期間を経て結婚、出産というライフコースはほぼ定着してきたとされる。そうではなく「順番が逆」になって妊娠が先行する結婚は「できちゃった結婚」などと呼ばれ近年認知を深めつつあるといえるだろう。20代後半から30代半ばで、数年の交際の後に妊娠先行型結婚をした夫婦を対象とすることで、未婚化晩婚化の原因ともいえる結婚に対するモラトリアム的な態度に共感する一方、妊娠を契機に自らの関係を結婚に向けて解釈しなおすことが迫られている状態に焦点を当てることが可能となるであろう。結婚と出産の関係は多くの論者が指摘するところである。結婚せずにシングルという立場を維持している理由として、子どもを持つ予定がないという点があげられる〔岩澤2001〕という議論にみられるように、結婚を回避する態度と子どもを持つ予定がないという態度は密接な結びつきがあると考えられる。「できちゃった結婚」の特徴として、予定がないにも関わらず思わぬ妊娠をしまい急遽結婚を決めたという点があるだろう。このことは、結婚モラトリアムにあった従来の関係と、結婚することになった現在の関係を、妊娠という契機を通じて無理なく調和させなくてはならない事態におこまれることを意味している。20代半ばから30代前半のできちゃった結婚の夫婦を対象とすることで、妊娠と結婚がどのように結びつけられ、夫婦の間で位置づけられていくのを焦点化する事が可

能となる。それによって、結婚モラトリアムであるカップル間で結婚にどのような意味が与えられているのかをより具体的に把握することができるだろう。

なお、本稿では、妊娠していることが分かってから結婚に踏み切った「できちゃった結婚」を学術的に示す用語として「妊娠先行型結婚」という語を用いる。「できちゃった結婚」が特殊な妊娠の形態である点に注目し、人口動態的な視点からこの事象を把握しようとした用語として「婚前妊娠」がある。婚前妊娠と妊娠先行型結婚は、事象としては同じものを指すが、妊娠先行型結婚は「結婚に先んじて妊娠している」結婚を示すという含意がある。結婚に注目した形の用語を準備することによって結婚研究の議論に統一性や広がりを持たせることができると考えられるためである。

妊娠先行型結婚に注目するもうひとつの意義は、こうした結婚そのものが増加傾向にあるということが人口統計的に指摘されている点である。結婚前に妊娠をしている状態は「婚前妊娠」とよばれ、期間などの細かな定義は論者によって異なるものの一定の関心を集めている存在ということができよう。第1子出生が結婚後7ヵ月未満である夫婦は、1970年頃では6.7%であったのが1997年には15%を超えており、20歳前後にとくに多いとされている〔岩澤 2001〕。また、結婚期間が妊娠期間よりも短い出生は2001年度ではおよそ15万人であり嫡出第一子の26.3%に相当する。〔厚生労働省大臣官房統計情報部 2002〕。婚前妊娠の時系列的な変化の原因としては、性規範の変化や学歴、地域差等との関連などが考えられるが〔富吉 2001〕、本稿では妊娠先行型結婚の急激な増加については論じない。同じ妊娠先行型結婚であっても階層や年齢、交際年数などによって結婚に対する解釈は異なると予想される。妊娠先行型結婚そのものをめぐる分析には、結婚モラトリアムとは異なる文脈が必要であると思われる⁽¹⁾。

3. 調査方法と概要

カップル間のやりとりを観察するには様々な方法が考えられるが、今回は夫婦ふたりきりで自らの結婚について会話してもらい、それを録音したうえで分析するという方法を選択した。本調査の特徴は、これまでの関係性や結婚をめぐる解釈の再確認を夫婦が相互に行うという状況を設定するために、調査者が直接会話に参加せずに調査を行うという変則的な方法を採用した点である。会話のコントロールを完全に当事者にゆだねることによって、夫婦の間に結婚の意味はどのように形成され、解釈していくのかをプリコードされていない形で把握することが可能となるのである。調査者不在で調査をおこない会話場面への介入を事前の最小限の説明だけにとどめることによって、どのようなトピックスがどのように語られるかは対象者にゆだねられる。このため、調査者が聞きたいことを聞き出す、という対象者と調査者の相互行為ではなく、夫婦の間のやりとりのみに分析の対象をしほることができるのである⁽²⁾。

対象者には「夫婦ふたりきりでの、結婚に関するフリートークを録音させてください」という形で調査を依頼、実施した。事前に調査の主旨を簡単に説明し、会話の糸口として「結婚のきっかけと、それが決まったときの気持ちなど」「子どもができたことにまつわる相手や周囲の反応」「『できちゃった結婚』と呼ばれることに対してどう思うか」という3つの項目を提供した。客観的な整合性は問わないのでつじつまが合わなくても「普段通り」の会話を心掛けて欲しい旨と、どういった話題が持ち出されるかも調査項目に含まれてい

る点を説明し、提示された項目にとらわれず自由に話すことを心掛けるよう理解を求めた。リラックスした雰囲気では話ができるのであればどこでもかまわないということで調査場所も設定しなかった。こうした形式で11組のカップルに調査を依頼したが、全面的な協力を得る事ができたのは1組だけである。そのほとんどが夫婦間の会話を提供するのには恥ずかしいという理由によるものであり、単独のインタビューや調査者を交えてのインタビューに夫婦で参加するのはかまわないということであった。今後信頼関係を形成していくことによって、違った形で協力を得る事ができると考えられる。現時点で調査に協力してもらえたケースは8組であり、その内訳は夫婦のみでの会話が1組（A夫婦）、夫婦と調査者の3名でおこなったインタビューが1組（B夫婦）、対面でのインタビューが1人（C夫婦の夫）、電話によるインタビューが5人、である。すべての調査は対象者の自宅や自宅に近いファミリーレストランなどで行われており、録音した物を全てテープ起こした後、本人からの了承を得たうえでデータとした。

4. 分析

本稿の目的は会話の中で妊娠や結婚がどのように結びつけられ、夫婦の間で位置づけられていくのかという点に注目して分析を行うことである⁽³⁾。このため、合意や否定がどのように形成されていくのかといった相互作用の効果はなるべく排除し、会話の意味内容に注目した分析を行った。以下ではA夫婦の会話データを中心に分析を進めていくが、必要に応じて、B夫婦へのインタビューおよびC夫婦の夫へのインタビューによるデータについて参照していきたい⁽⁴⁾。本研究において、調査への協力が得られた夫婦は、おおむね高学歴であり、女性が安定した収入を得ているという特徴があった。また、一般に結婚モラトリウムにあったこうした夫婦は妊娠が先行したことに若干の違和感を抱えていることが多く、両親や親戚などに受け入れてもらえるかどうか不安だった、といった例を出して自分たちの結婚が逸脱した形であることを自ら認める発言を行う場合が多い。以下の分析で取り上げる夫婦はこうした特徴を全て備えており、会話データにおいて必要な話題がほぼカバーされているといえる。ケース数として十分とはいえないが、妊娠先行型結婚を通じて結婚モラトリウムにおける結婚の意味づけを探るという本稿の目的を達成する上では、不足のないデータであると考えている。

モラトリウムを支える状況のひとつとして、婚前交渉の一般化や自由な男女交際を認めるムードといった恋愛や結婚に対する比較的新しい考え方を身につけているという点をあげることができる。筆者がおこなったインタビューにおいても、結婚前から実家住まいの妻の家に遊びにいていた例、カップルの親同士も結婚前からつながりがあった例など、かなりオープンで現代的な男女交際のありかたがみてとれる。しかし、対象者は単に恋愛の自由を享受しているだけではない。調査において語られる結婚に対する結婚前のイメージは家族役割を大きく意識したものであり、むしろこうしたイメージから脱却できなかったことがモラトリウムに拍車をかけたといえる。A夫婦の会話データにおいては、夫が長男で家業の跡取であることを意識して、次のような会話が行われている。

AW：ねえ、そんで、弟の所は（子どもが）いるのにお前達はいつ（子どもを持つの）かい？とか、言われると、ねえ、なんかねえ、言われないまでも思われると、いやじゃん、私とし

ても。

AH：言わないまでも、絶対思われそう。

AW：ねえ、そうやって思われて生きていくのはいやだったけど、別に結婚していなければさ、そこまで思われないじゃん。

また、仕事の関係で妻の帰宅が遅いことに関して次のような会話も行われている。

AW：逆に、もしも、妊娠しないで結婚してたら、どうだったのかなって。

AH：あー。どうだろう。

AW：でも、結婚してさ。あれ、なに、帰りが11時とかで、毎日。妻が。っていうのは、どう？
旦那として？

AH：ああー、ああ、どうでしょう。

AW：今までは、別に結婚していなかったから。良かったけど。結婚したら。私的に。

AH：ああ、でも、俺、子どもがいなければぜんぜん別にそれはOK。自分の中じゃオッケーだな。
で、別に、自分も、その間、なに、勉強したり、ね。色々好きな事できるわけだし。

こうした会話の背後にあるのは恋愛の自由化だけではなく、結婚後は家族としての役割をまっとうしなくてはならないという社会的プレッシャーにさらされるという前提だといえるだろう。結婚モラトリウムは恋愛の自由化と家族に対する社会的プレッシャーの両方の影響にさらされた結果であり、妊娠先行型結婚をした夫婦であっても例外ではない。

このような状況下において、妊娠はモラトリウムを解消するきっかけであるといえる。夫婦の会話データにおいても、結婚前の結婚モラトリウムと結婚後の現在の関係を無理なく調和させていくためのきっかけとして妊娠は位置付けられている。モラトリウム、妊娠、結婚という3つの要素を夫婦双方が納得できるかたちで位置付けていくために、妊娠先行型結婚の夫婦はふたつの特徴的なレトリックを用いている。以下に順を追ってみていこう。

1) 不問の領域の存在

独身女性が妊娠した場合、選択肢は(1)結婚して出産する、(2)結婚しないで出産する、(3)中絶するという3つに大別されるであろう。妊娠先行型結婚は(1)の選択肢を選んだ結果であり、理論的に考えれば、全ての選択肢を比較検討した結果なんらかの根拠があって(2)および(3)の選択肢は却下されたものと考えられる。しかし、A夫婦の会話データにおいては、夫婦の間では出産と結婚はア・プリオリに結びついたものとして位置づけられていて、(1)の選択肢を選んだ理由は不問に付されており、それにともない、他の選択肢の存在は排除される。これは、結婚モラトリウムを経て妊娠先行型結婚した他の夫婦においても観察できる点であり、夫婦間のやりとりにおける大きな特徴であるといえる。

B夫婦に対するインタビューにおいては、これらの選択肢をめぐって、「(もしも)子どもができてたら、どうするっていわれて。じゃあ結婚するよって。(妻の目には)俺がなんか、簡単に答えを出したように思えたのかも知らないけど。(中略)でも、そう思って

いたからね。もしできちゃったら、社会人だし、もうそれは結婚するよって思ってたから」(BH)という夫の語りが展開されている。

このように、夫は出産と結婚とア・プリオリに結びつけており、その他の選択肢については一言も言及することなく発言を終えている。しかし、妻の方は突然の妊娠と夫の態度に混乱していたと語っていて、(1)の選択肢をア・プリオリに選ぶことができなかったことを「子どもができる前に、ちゃんと結婚式して、新婚旅行も外国行って、きれいな家に住んで。で、1年後か2年後に子どもつくってっていう、理想があったから。だから、急にそんな(子どもが)できちゃって、急に彼から良いよ、なんて言われちゃったら頭の中実際、混乱しちゃって」(BW)と語った後、「ほんとにこんなんでいいのかなあ、もうちょっと悩んでくれないのかなあって」(BW)と結んでいる。この夫婦の間では妊娠と結婚との関連づけにギャップが生じていたといえるが、ギャップの原因や妻の葛藤の原因は追求されない。夫は「独身の時は、結婚したい結婚したいっていつてたくせに、いざ結婚するってなったら、何でそんな悩んで。全部、前言ってたこと、ウソじゃん」(BH)と妻のストーリーの矛盾を指摘し「ウソ」のレッテルを貼り、結局この夫婦においては、妊娠をきっかけに急遽結婚することに対する妻の違和感は「妊娠して体調が悪かった」ことと「マリッジブルー」に起因した気の迷いとして解釈され結論づけられる形で解釈されている。

A夫婦の会話データにおいては、出産と結婚との結びつきは結婚の決意という形で話題になった。

AH：決意。決意なのかな、ああ。まあ、できちゃったから。しかたないっていう。

AW：しかたない。そんなときさあ、すぐ結婚しようって思ったの？

AH：ん？

AW：まず最初に結婚っていうのを考えたの？産むとか産まないとか、その前に

AH：え、でもまあ、子どもができたなら結婚でしょう。

こうしたやりとりに続いて、(2) および (3) の選択肢も話題となった。

AW：なに、産むけど結婚しないとか、そういう選択肢はなかったの？

AH：産むけど、結婚しない。それは、でもまあ、やっぱり、なんだろうね。なんでなんだろう、道義上できないのかな？

AW：ふーん。

AH：うん。まあ、でも、自分の子でもある訳だしね、結婚しない訳にもいかないし。

中略

AW：(結婚を)しないで、産むっていうのもないし、子どもができたけども産まないっていう選択肢もなかった。

AH：うん、中絶するなんて事は、選択肢は、ない訳だし。じゃ、結婚しかないかっていう(笑)。

AW：ふふふ。

AH：もう、当然というか。

なぜ中絶しないのか、なぜシングルマザーというわけにはいかないのかについて踏み込んだ会話が行われるわけではなく、妊娠が結婚に結びついているのは消去方で考えて「もう、当然」である様子をうかがうことができるといえる。結婚モラトリウムであった理由は実体験に基づいた例が具体的に列挙されているのに対して、シングルマザーや中絶を避ける理由は観念的かつ断定的で、説明する力が弱いといえるのではないだろうか。このA夫婦の会話データにおいては、理由として社会的制度などについても言及されている。

AH：やっぱなんだろう、制度的にも、不利だし…。で、やっぱ、子どもの、こと、考えたら…
うん、やっぱ、一番、ねえ、結婚しといたほうがメリットは大きいだろう、ねえ、色々扶養の手当てとかだってそうだし。なかなか、シングルマザーで育てるって訳にもいかないだろうしね。

AW：そんな感じだよな。

しかし、こうした言及は、「もう、当然」結婚することを前提とした上で展開されていて、理由づけとしてのウェイトは全体として低いといわざるをえない。

不問の領域というレトリックを用いることによって結婚と出産はほぼイコールに位置付けられる。これによって、結婚のきっかけとしての妊娠の正当性が増し、通常のライフコースからは逸脱しているというニュアンスが薄くなるという効果があるといえる。妊娠先行型結婚の「順番が逆に」なった結婚である、という部分は話題にのぼらなくなり、結果として逸脱が隠蔽されることになるといえるだろう。また、不問の領域には、これまでの結婚モラトリウムであった状態を否定することなく、結婚するための正当な理由を手に入れるという効果もある。また、子どもができたなら結婚するしかないという立場にたつことで、結果としてこれまで結婚を躊躇せざるを得なかった諸事情や、結婚に対するあこがれやライフプランを無効化し、これまでと異なった文脈で結婚について語るための資源を手に入れる結果となる。不問の領域というレトリックを使うことによって妊娠が先行しているために生じる困難や結婚モラトリウムにあった関係と現在の関係の矛盾を問題化せずに、自らの結婚を破たんなく語る事が可能となるのであといえるだろう。

2) 結婚の動機の外在化

調査の対象者は結婚に対するモラトリウムの態度を夫婦の間で共有していて、子どもができなかったら自分たちは結婚していなかっただろうという点で意見を一致させている。B夫婦に対するインタビューにおいては、「半分は子どもに決められてっていうか、言い方悪くすればそうだから。だから、子どもが生まれなかったら一緒に2人で、彼女とふたりで何年くらいかかったらそういう風に言いたくなるっていうかさ、結婚しようって言うまでになるまでのレベルっていうのが」(BH)という夫の発言を補う形で、「なかったかもしれないよね」(BW)と妻が発言している。こうしたモラトリウムをめぐる会話の後、「子どもが縁結び、じゃないけど」(BH)という夫の問いかけに対して「ほんと、それは思うよね」(BW)という形での妻の同意が形成されている。こうした会話に代表されるように、妊娠がきっかけとならなければ結婚しなかったのではないかというストー

リーは夫婦間で共有されていることが多く、結婚モラトリアムにおいてそれだけ妊娠が結婚のきっかけとして大きなウェイトを占めているということができよう。A夫婦の会話データにおいては、結婚前の交際状態と妊娠との関係に関して次のような会話がある。

AH：んー。ま、でも、どうなんだろう。もう6年くらい？

AW：うん。

AH：つきあってたからね。

AW：うん。

AH：なかなか、こうでもない、なかなか結婚でことにも。もし、もし、じゃあ、できてなかったら。どう？

AW：ねえ、結婚しないよ、そしたら。

しかし、妊娠先行型結婚の夫婦は不問の領域によって結婚するしかないと考えた上で、単に妊娠をきっかけに結婚したと考えている訳ではない。妊娠をきっかけとしているが、しかるべき相手としかるべきタイミングで結婚することができたという意味づけをおこなっているのである。この点に注目したい。

この背景には、以下のふたつのロジックが隠されている。第一は、性交渉は愛情の表現であり、子どもはその結果であるとするロジックである。このロジックは、ふたりは愛情によって結びついている。それゆえに子どもができたのだという一般的な言説を補強するものである。第二は、妊娠は自ら選ぶことができない運命的なできごとであるというロジックである。できるはずのない子どもができたということは、ふたりは結婚するに相応しい運命的な関係なのだ一般的に結婚に求められる言説を補強する。このふたつの言説は相互に補完的である。妊娠先行型結婚の夫婦は両方の言説を循環的に用いることによって、自らの関係を妊娠によって運命を知らされた恋愛結婚という形で解釈し、相互に納得しているといえるだろう。

A夫婦の会話データにおいては、次のような会話がかわされている。

AH：妊娠が発覚するっていうか、子どもを作るくらいには、もう、大体、なんだろう、結婚する気にはなっていたけど。ああ、なっていたってのはおかしいな。でも、選択肢のひとつとして、ああ、別に良くなっている気には（なっていたよね）

AW：そうだね

中略

AW：子ども、が、生まれるなら、そのお父さんは、うん、

AH：若い方がよい？

AW：いや。お父さんは、（現在の夫だと）もう決まっていたよ、自分の中では。でも、結婚したっていうんじゃないかって、自分の子どものお父さんつつうかあ、一緒に子どもの親になって欲しいっていう。気持ちは、あったから。だからたぶん子どもを作ったんだろうけど。

AH：うん

夫婦ともに現在の相手に愛情があったから子どもを設けることができたのだという点で

意見が一致している。こうしたロジックを用いることによって、結婚モラトリアムの関係において相手に対して愛情を感じていた、ということの比重が相対的に重くなるといえるだろう。この点についてはB夫婦においてはより積極的に言説化されていて、「好きじゃなかったら8年も付き合っていられなかったし。まあ、好きになった人の子どもだから、うん、産んでみようかなっていう気も正直言ってあったから」(BW)という語りが行われている。

第二のロジックについては、夫婦のみでの会話データよりもインタビューにおいてより多く観察された。「タイミングっていうか、そう、うまくできたもんでね。いろいろと重なってね。なんかね、結婚するカップルってそういう風に追いつまれていくっていうか。なんかね、じゃあ、もう結婚するしかないねえって。今が一番良いよっていう。時期ってというのが、あるんだろうなあ」(CH)というもののや、「(両親に)子どもができたっていったら、じゃあもうそれはね、神様の。うん、神様が結婚しなさいっていう合図なんだから、もう、それを機にね。結婚したら?って」(BW)といった語りに端的に現れているといえる。

こうしたロジックは、結婚モラトリアムにある状態を打破するためのきっかけを関係の内部でなく外部に求めるためのレトリックであるといえる。動機の外在化というレトリックを用いることによって、避妊の責任の所在や、いままでは結婚する必要を感じていなかったのになぜわざわざ結婚するのか、といったこれまでの関係にまつわる諸事情は合理的な説明を抜きに隠蔽される。これによって、結婚の決め手がないままモラトリアムを続けていた関係が代替不可能な相手との恋愛結婚という関係に読み替えられるのである。その結果、ふたりが結婚に値する関係であったとさかのぼって意味づけることが可能となる。A夫婦の会話データにおける、次のような会話は、こうした読み替えの結果、遡及的に自らの関係を結婚に向けて再解釈したことを共有している点を示しているといえるだろう。

AH: まあ、でも、でも、だいふ、あの、なんだろう。結婚する前の、あの、妊娠発覚の一年前とは、だいふ、その一年間で、大きく気持ちは変わったかもしれない。

AW: うーん。そうだよな、まあ、結婚する気ないとか言ってたもんね。

妊娠をきっかけとして相手は結婚するに値する運命の人なのだと確信することができたというストーリーは、ロマンティックラブイデオロギーを含意したものである。妊娠していたからこそ結婚する必然性に足る親密さを味わうことができたのだという解釈を行うことで、ロマンティックラブイデオロギーに添った形のストーリーに自らの関係をなぞらせることが可能となるのだ。結婚の動機を、妊娠という関係の外部でありながら愛情という文脈で捉えることが可能でできごとを求めることは、妊娠先行型の結婚であっても自分たちの関係は正統な恋愛結婚と同じように深い愛情によって運命付けられたものであると意味づける効果があるといえることができる。

3) レトリック成立の特徴

以上に見てきたように、いずれのレトリックも、結婚に対して合理的な説明を与えることを回避し、妊娠先行型結婚が内包しているほころびである「順番」が違ふこと、これま

ではさしあたって結婚をするつもりがなかったこと、妊娠の責任の所在などを隠蔽する働きがあった⁽⁵⁾。妊娠先行型結婚にまつわるレトリックは、妊娠先行型結婚の逸脱性を隠蔽し、自分たちの関係はロマンティックラブイデオロギーに沿った恋愛結婚であり結ばれるのが当然の帰結であったことを導きだす。

こうしたレトリックの前提となるのは、子どもを適切な環境で養育することは何よりも優先されるという了解である。

AW：うん。だからね、わたしは、なんだろう。結婚。結婚イコール子どもがいるイコール家族じゃん？だから、私は、私の親と家族なんじゃなくてあなたと、これからうまれる子どもと家族になるべきだから。家族はさ、一緒にいるべきだよ。

AH：まあ、それはそうだけど、自分を点に考えてみればさ、妹やね、両親だって家族なんだから

AW：いや、もう家族じゃないよ。

AH：違うの。

AW：別世帯だよ。うん。

こうした語りは結婚と出産が分かちがたく結びついている事を示しているといえる。A夫婦の会話データにおいて調査対象者は調査時間の多くを子どもの養育をめぐる会話にあてている。夫婦として結婚について語っていたはずが子どもの養育について語ることになるのは、妊娠先行型結婚の夫婦は自分達が子どもの養育のために結婚したことを自覚しているためであり、子どもの存在を介在させることで自分達の間を夫婦として位置づけているためであるということが出来る。他のインタビューデータにおいても「早く入籍を済ませて母子手帳の名前をK（夫の姓）にしなさいっていう。子どもがもし、将来そういうのをみたときになんか、いやな思いとかするかもしないからって」（CH）という話題が登場しており、結婚そのものが子どもを前提としていることを物語っているということが出来るだろう。

妊娠先行型結婚の夫婦にみられるレトリックは恋愛結婚を再生産し、その前提となるのは家族構成員相互の強い情緒的な結びつきと子ども中心主義を強調しているいわゆる「近代家族」である〔落合 1997〕。世間的認知を強めつつある「できちゃった結婚」という言説が社会的な認知を高めているのも、結婚の正当性を担保する「恋愛結婚」として関係を意味づけるためのレトリックと、形式的には逸脱したものであっても「近代家族」を形成することを前提とした「正統派」の結婚であることを暗黙のうちに了解するための解釈の資源が準備されているからであるということが出来る。

妊娠先行型結婚が社会において受け入れられて行くことは、結婚に至るまでのさまざまなライフコースを選択可能とする多様性をうみだす面もある⁽⁶⁾。しかしその一方、その内面的な意味づけは逆に、恋愛結婚を経て「近代家族」を形成するという従来通りストーリーに沿ったものとして関係性に対する意味づけを収束させようと働いている面があることを指摘したい。国立社会保障人口問題研究所の調査において、恋愛結婚志向は年々強まっていることがいわれていることをかんがみても、結婚や恋愛をめぐる社会的状況が急に変化することは難しいといえる。妊娠先行型結婚のレトリックは、結婚に必要性をみいだせ

ないでいたが恋愛結婚を達成したいと考えている多くの未婚者のニーズにこたえることができる装置であり、今後も多くの人に共感されるライフコースとして位置づけられていくといえるかもしれない。

5. まとめ

本稿の目的は、カップル間のやりとりを通じて、結婚モラトリウムにあったカップルが結婚に与える意味を把握することであった。以上の分析からも、結婚モラトリウムを経て結婚した夫婦のもつ家族イメージは近代家族そのものであり、結婚は近代家族を形成するためのスタートラインとして位置づけられていることがいえるであろう。妊娠先行型結婚は従来のライフコースにとらわれずに自分なりの多様な結婚を模索する夫婦ではなく、「順番が変わってしまった」けれども自らの結婚は正当で妥当なものであるというストーリーを作り出そうとする夫婦の姿であるといえることができる。自らの結婚を正当で妥当なものとするために、妊娠先行型結婚においてはふたつのレトリックがもちいられている。ひとつは妊娠先行型結婚において妊娠と結婚はア・プリオリに結びついていて、その前提は不問の領域として共有されているというものである。もうひとつのレトリックは結婚の動機の外在化である。これによって、妊娠していたからこそ結婚する必然性に足る親密さを味わうことができたのだというストーリーを形成する。したがって、妊娠先行型結婚は恋愛結婚の一種としての解釈的なポジションを獲得するのである。いずれのレトリックも、恋愛結婚が再生産を果たすためのものであり、最終的には近代家族が再生産されているために構築される言説であるといえることができる。

妊娠先行型結婚に対して当事者がポジティブなイメージをもつことができるのも、形式的には逸脱しているものの結婚に対する最終的な意味づけは近代家族イデオロギーの範疇の中に納めることができるからであろう。また、妊娠先行型結婚の当事者も自らの結婚を恋愛結婚と近代家族を再生産させる形で意味づけることを志向することで、自らの結婚にまつわる矛盾を回収しようとする相互行為を行っているといえることができる。こうした言説空間が形成されるのは、近代家族の規範が抑圧的に働いているためであるというよりも、現在の結婚は近代家族イデオロギーによってしか正当性を獲得することができず、近代家族イデオロギーの中で近代家族が再生産されているという図式の中に自らおさまる形で結婚を語らざるを得ないという状況を反映しているものだといえるだろう。現在における結婚をめぐる言説の状況を如実に表しているのが、妊娠先行型結婚といえるのかもしれない。

註

- (1) 一般的にいわれる「できちゃった結婚」は避妊知識の不足や避妊の協力を得る事ができなかったため思わぬ妊娠をしてしまい、やむを得ず結婚する事にした軽はずみな性衝動の結末という印象をもたれがちだといえるだろう。実際に「できちゃった結婚」しているのは圧倒的に10台後半から20代前半であることを考えあわせても[厚生労働省大臣官房統計情報部 2002]、10代における妊娠先攻型結婚を対象とした議論は今後必要なものとなっていと考えられる。
- (2) 夫婦の対話である以上、関係を破たんにつながるような発言はそもそも少ないということが予想され、状況によって発言の内容が逆に規定されてしまうことも考えられる。しかし、今回の調査では会話の内容が真実であるかどうかではなく、夫婦の間でどのような会話が達成されるかが分析の対象である。このため、こうした調査方法をとったことによる方法論的な弊害は最小のものとなったと考えられ

る。

- (3) 「当事者の意識や言説の中で組み立てられ、変容を受けていくものとして考察する」[田渕 1996]という視点を持つものであり、主観的家族論を前提としたものである。相互行為における主観的な家族について扱った研究には木戸[1998]などがあげられる。
- (4) 夫婦の会話データは2001年11月に東京都の調査対象者自宅にて行われた1時間30分におよぶA夫婦（夫27歳、妻27歳）の会話を元に、3者間インタビューデータは2002年2月に埼玉県 of 調査対象者自宅にて行われたB夫婦（夫26歳、妻26歳）と筆者を交えた1時間のインタビューを元に、対面インタビューデータは2002年2月に埼玉県のファミリーレストランで対象者C（夫27歳）と筆者との1時間20分の対面インタビューを元に作成されている。引用の際には、夫婦の区別をするためにABCの記号と、夫婦間での発言を区別するためにH（＝夫）、W（＝妻）の記号を付した。したがってAHと表記されている場合は夫婦の会話データにおける夫の発言となる。なお引用中における括弧内は筆者による補足である。
- (5) このことは、調査対象者の選定と大きなかわりがあると思われる。今回の対象者は安定的な関係を築いてきたカップルで、結婚前からふたりの交際を認めていた親も少なくない。10代の妊娠先行結婚のカップルなどであっても同じ状況となるかどうかは、今後の調査対象を広げていくことによってカバーしなくてはならない。
- (6) 出産にまつわる女性の自己決定権を家族の中でどのように位置づけていくかは、生殖技術をめぐる自己決定を考えていく上で重要な問題である[浅井 1996]。こうした議論において妊娠先攻型結婚がどのように位置づけられるかは今後の課題としたい。

文献

- 浅井美智子 1996 「生殖技術と家族」 江原由美子編 『生殖技術とジェンダー』 勁草書房 pp.255-284.
- 岩澤美帆 1999 「婚姻・出生プロセス再考—DINKS、婚前妊娠、婚外子の現状」 『統計』50(7):73-77.
- 岩澤美帆 2000 「意図せざる妊娠の数量分析」 『生存科学』11:7-21.
- 岩澤美帆 2001 「少子化する先進諸国における日本の位置づけ—男女関係と出生調整行動の視点から」 『季刊 エイジング』19(3):40-45
- 江原由美子 1988 「『結婚の意味』の変貌—規範性の喪失と利害判断志向」 日本家族心理学会編 『家族心理学年報6 結婚の家族心理学』 金子書房.
- 落合恵美子 1997 『21世紀家族へ（新版）』 有斐閣選書.
- 木戸功 1998 「相互行為を通じた「家族」の構築と知識のダイナミクス」 『人間科学研究』11:87-99.
- 国立社会保障・人口問題研究所 1997 『第11回出生動向基本調査 結婚と出産に関する全国調査』.
- 厚生労働省大臣官房統計情報部 2002 『出生に関する統計の概況』 人口動態統計特殊報告.
- 田渕六郎 1996 「主観的家族論—その意義と問題」 『ソシオロギス』20:19-38.
- 富吉素子 2001 「結婚と出産における時間関係」 加藤編『家族形成のダイナミクス』 日本家族社会学会全国家族調査（NFR）研究会：81-93
- 宮本みち子・岩上真珠・山田昌弘 1997 『未婚化社会の親子関係—お金と愛情に見る家族のゆくえ』 有斐閣選書.
- 山田昌弘 2000 「結婚の現在的意味」 善積京子編『結婚とパートナー関係—問い直される夫婦』 ミネルヴァ書房 pp.56-80.

（早稲田大学大学院博士後期課程）